



クラシックって楽しいな!

(オーケストラにまつわるエトセトラ)

オーケストラの迫力ある演奏は、多くの人たちにささえられているんじゃ。そういった背景を知って演奏を聴くと、もっとクラシック音楽を楽しむことができるんじゃ!



 公益社団法人国際音楽交流協会

〒602-0894 京都市上京区上御霊仲町 457-10
TEL : 075-414-1311 URL : <http://www.imea.or.jp>



このパンフレットは、**宝くじ**[★]の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

オーケストラを支えている様々な人たち



楽器運搬

楽器はとてもデリケートで高価なもの。運搬には細心の注意を払わなくてはならない。

トラック等での運搬の際は、スペースの有効活用や運搬中の荷崩れ防止のため、綿密な計算による最も妥当な運搬方法を考える役目等も担う。



インスペクター

リハーサルや本番に関わる段取りをする。指揮者と団員の中間的な役割で団員の中から選ばれる事が多い。リハーサルの開始時刻や終了時刻、また練習時間などの時間配分について指揮者と確認する。また、時には団員全員の利益を代弁し意見を述べることもある。



ライブラリアン (楽譜係)

演奏で使用する楽譜の調達と管理を専門に行う人。楽譜から楽器の編成を調べ、団員だけで足りないパートがあればエキストラ奏者を手配する。スコアからそれぞれの楽器の譜面を抜き出し、楽器ごとのパート譜を作る。この作業だけで何週間もかかることがある。

また、楽譜の補修もライブラリアンの重要な仕事。使用頻度が多く古くなって傷んだ楽譜を補修し、また時間が経ってはがれたり、変色したりしないように予防的な工夫も施す。更に、演奏者が演奏しやすいように、休符でめくれるようにするなど譜めくりしやすいための工夫等もする。



それぞれの楽器はあとで
詳しく説明しておいたぞ!



ステージマネージャー

コンサート本番では指揮者や楽員の出番を促したり、椅子や譜面台、ステージのセッティングをするほか、出演者が演奏に専念できる環境を整え、コンサートが滞りなく進行できるように全てを司る。

また、事前に行うホール技術スタッフとの打ち合わせ（音響・照明等）も重要な仕事である。

通常、作曲家は楽譜の中でボーイング（弓使い）までは指示ない。コンサートマスターにボーイングを決めてもらい、それを元に弦楽毎の首席奏者にパートのボーイングを決めてもらい、それをそれぞれのパート譜に反映する。弦楽器の弓の動きが全員きれいにそろっているのはこのように書き込みが統一されているからである。楽団のレパートリーになっている作品でも、指揮者が求める音楽によってボーイングが異なる事があり、このボーイング一つで音楽がまったくと言っていいほど変わってしまう。演奏者がボーイングの指示を見落とすと、気がついたら一人だけ

違うボーイングで演奏していたということになりかねない。

また、同じ曲でも様々な版があることが多く、指揮者がどの楽譜で演奏するのか確認し、所有していない場合はレンタルする。レンタル譜の中には非常に高額なものもあり、これが理由でしばしば敬遠される事もある。



オーケストラを構成する楽器

オーケストラのスコアは、何十段もの5線譜が並び、セクション（木管楽器、金管楽器、打楽器、編入楽器、弦楽器の順）ごとに高音楽器から書かれている。それぞれの楽器がそれぞれのパート譜を持つ。

木管楽器

木管楽器はフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットの4つで、それぞれの音域の違う同属楽器がある。

- フルートの仲間（フルート属）→ピッコロ、アルト・フルート
- オーボエの仲間→イングリッシュ・ホルン、オーボエ・ダモーレ
- クラリネットの仲間→小クラリネット、バス・クラリネット
- ファゴットの仲間→コントラ・ファゴット

これら木管楽器の仲間は全て同じ機構を持ち、同じ指使いで演奏される。フルート奏者が必要に応じてピッコロを担当するということが可能なのはこういう理由による。また、これは「持ち替え」と呼ばれる。

フルート



高音域を主として担当する花形楽器で吹奏楽でも大変人気がある。昔は木製であったため木管楽器に分類されるが、現在の材質は金、銀、プラチナなどが主流。横笛の一種で他の木管楽器と違いリードを持たない。

J.S. バッハやテレマンなどバロックの作曲家がソロ楽器として好んで採り入れた。

オーボエ

子どもの頃遊んだ草笛と同じ原理で音を出す。草笛は二枚の葉を口に挟んでピーっと鳴らすのが、オーボエも同様に二枚のリードを使う。これをダブルリードと呼ぶ。

葦の茎の断片を削って作った2枚のリードを振動させて音を出す。美しい音色を出すためにオーボエ奏者は自分でリードを作る。演奏時には温度や湿度、更に体調によってもその音色がまるで変わってしまうという、とても神経質な楽器であり、木管楽器では一番難しいと言われる。

オーケストラではソロを担当する場面も多く、他の管楽器と違って少ない息で長く吹き続けることができるため、じっくりと歌い上げたり時には駆け回ったりと、印象的な演奏が可能である。

また、オーケストラのチューニングで一番はじめにA（ラ）の音を出す楽器として馴染みである。オーボエは構造上音程が一番安定していて、かつ前述の通り長い音を吹き続けられる事で良く響き他の奏者に聞こえやすいというのがその理由。一方、オーボエは構造上、音の高さを簡単に変えることが難しいため、他の楽器がオーボエに合わせるしか無いというのも理由の一つ。

オーボエ不在の作品はクラリネットでチューニングするなど別の楽器が代役を務める。



クラリネット

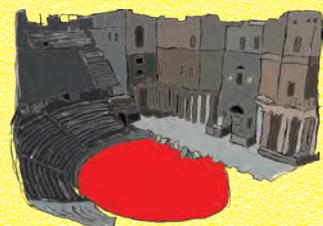
18世紀終わり頃からオーケストラに登場するようになった意外と新しい楽器。オーボエと違って一枚のリードを振動させて音を出す。

同じ曲の中でも音色によってA（アー）管とB \flat （ベー）管の2本を使いわけると代表的な移調楽器（譜面に書かれた音と出てくる音の高さが異なる楽器）。



オーケストラの生い立ち

オーケストラという言葉は、古代ギリシャの円形劇場における舞台と客席の間にあるスペース（楽器奏者とダンサーの空間）が『オルケストラ』と呼ばれていた事が起源とされる。



弦楽合奏に管楽器の加わった管弦楽は、バロック時代にオペラの伴奏として、弦楽合奏補強のために木管楽器が加えられたのが始まり。器楽合奏隊は最初は舞台裏に配置されていた。

古典派時代には交響曲や協奏曲、またオペラの伴奏として発展、コンサートホールでの演奏に適応し弦楽器が増え、この頃にクラリネットなどの新しい楽器が加わった。

ロマン派の時代になり、管楽器が更に増え、マリリンなどの打楽器、ピアノやハープなどの編入楽器も加わる事となる。近代的な意味での管弦楽団としてのオーケストラは17世紀に出現したと考えられている。

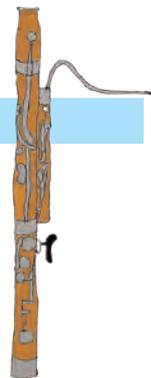
ちなみに、英語の ORCHESTRA には管弦楽団の他に、一階の客席や舞台前の一等席という意味がある。

ファゴット

基本的にオーダーメイドで、奏者によって一つ一つ異なる。30以上あるキーは今も増える傾向でバロック時代からその形は変わり続けている。

特にホルンと良く溶け合う。

オーボエと同じダブルリードの楽器で低音楽器として重要な役割を担っている。



金管楽器

フルートは金属で出来ているが昔は木製であったため木管楽器に分類されると前述した。実はその他にも木管楽器と金管楽器には音を作る原理に大きな違いがある。

一本の管を思い浮かべて、これを空気の柱と考える。この柱の途中にいくつか穴があり、この穴を指で開閉させ、空気の柱の長さを変化させることにより音の高さを変える。これが木管楽器の音を作る原理である。

一方、金管楽器はパイプの中に空気を通して音を出す。ピストンやスライドなどの装置によって、空気の通り道に迂回路を作る。この迂回路によるパイプの長さの長短で音の高さを変えるのが金管楽器で音を作る原理である。

フルートとは逆に、サクソフォンは金属で作られた楽器だが、音を作る原理から木管楽器という事になる。

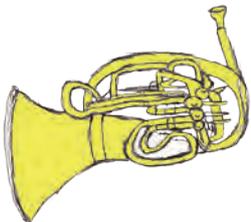
ホルン

狩りの時に使用していた角笛が発達したものとされている。

管がとても長く（3から4メートル程）何重にも円形に巻かれている。唯一後方に音を出してその反射音を聞かせる楽器。

倍音が多く音はずしやすく、また細い管に息を入れるのも難しいため、木管楽器のオーボエ同様、金管楽器の中で一番難しいと言われる。ちなみに、一番難しい金管楽器であることはギネス認定されている。ホルンを聞けばその楽団のレベルが分かるという説があるほど。

木管楽器と金管楽器の音色を上手く溶け合わせ役目を担う。楽譜でも両方のセクションに挟まれるように位置している。



日本のオーケストラ事情

オーケストラを運営・存続して行くにあたっては、定期公演以外でも公演の機会を作るための営業活動が不可欠である。

現在、日本オーケストラ連盟には36のプロオーケストラが加盟しているが、国や自治体からの補助金を得て運営しているというのが現状。しかし、多くの楽団員の組織を維持していくのは財政的に大変難しく、ましてや連盟に所属していないような地方の小さいオーケストラとなればその大変さは容易に推察できる。

トランペット

派手で輝かしい音色が特徴的。マーチ風の華やかなメロディーを受け持つ事が多い楽器。

モーツァルトの時代までは、どちらかというと「リズム楽器」のように扱われており、アクセントをつけるような形でティンパニなどと重ねて演奏する事が多かった。



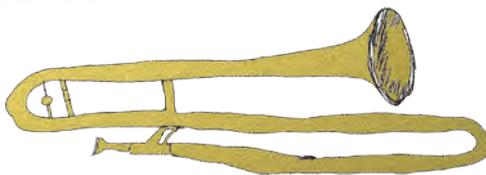
トロンボーン

「大きいトランペット」を意味する。

管をスライドさせて伸び縮みさせる事によって音程を作る。

15世紀頃から教会音楽の中で使われており、人間の声に最も近くハーモニーの美しさから「神の楽器」と言われ、厳か且つ壮大な音色で合唱を支えた。

この楽器が交響曲の中に初めて登場したのは、ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」の第4楽章。圧倒的な迫力は言うまでも無い。



チューバ

お腹の底から鳴り響き、金管セクションを支える頼もしい楽器である。金管楽器の中では比較的新しく生まれたもの。

ワーグナーはチューバを大変気に入っていたようで、彼の多くの作品に登場する。楽劇「ニーベルングの指環」のために彼自ら考案したワーグナーチューバがあるが、ホルンの音色に厚みを増すために作られたもので、ホルンのマウスピースを使い、ホルン奏者によって演奏される。



日本の音楽愛好家の皆様



セルゲイ・ガラクチオーノフ
ヴァイオリニスト
トリノ王立歌劇場管弦楽団コンサートマスター
ロシア国立モスクワ音楽院卒業

こんにちは、私はヴァイオリニスト、指揮者、そしてイタリアの音楽院で教授をしているセルゲイ・ガラクチオーノフです。言葉では言い表せないほど大きく、素晴らしく、美しい大海のような音楽の世界へようこそ。

全ての音楽家にとって最も重要なことのひとつは、いつ、どこで演奏するときも芸術性を追求することです。これは簡単なことではありませんが、これこそが我々の使命です。演奏者は、自分の持つ知性や知識を十分に活用して曲の解釈を得ます。そして、手に取ることはできなくても感じる事が出来る「感情」を、音を通じて聴衆と共有することに最善を尽くします。

コンサートマスターとしてオーケストラで演奏することは、大家族のリーダーになるようなものです。勿論、全ての演奏者が重要な役割を持っていますが、責任をもってオーケストラを先導し、そして指揮者とコミュニケーションをとる役割の人間が必要で。大家族のリーダーは、家族全員が成功裏にそして幸せに演奏できるように導きます。

ソリストとして演奏する時は、より自由に音楽と向き合うことができます。私は、常に作曲家に対する尊敬の念をもって曲の解釈に努めています。

海のようにどこまでも広く、そして様々な顔を持つ音楽の世界を楽しんで下さい！

打楽器

打楽器セクションではティンパニを除き、一人の奏者が大太鼓や小太鼓、シンバルやトライアングル、シロフォンなどを持ち替えて演奏する事がよくある。たくさんの楽器が登場する作品ではそれぞれのパート譜

- が必要となりとても複雑。
- 大太鼓、小太鼓、タンバリン、トライアングル、カ
- スタネット、スネアドラムトなどは音律の無い楽器で
- リズムや音色の効果のために用いられる。



ティンパニ

現在の様にペダル操作で音程を変える事が出来るようになったのは 20 世紀になってからで、音色の変化はバチ (マレット) によってつけられる。木やゴムであるいはフェルトなどで、音楽に合わせて使い分けるため、奏者は数十組のバチを持っている。



ほとんどの場合、楽譜上で「木のバチで」とか「フェルトのバチで」というように指定されているが、指示の無い場合は奏者のセンスに任される。

またティンパニの並べ方にはアメリカ式とドイツ式があり、アメリカ式は奏者から見て左側に低音、右側に高音のティンパニが置かれる。ドイツ式はその逆。

シンバル

一对のシンバルを両手で打ち合わせたり、すり合わせたりするなどして表情豊かな音色を作っていく。ベルリオーズあたりから吊しシンバルが登場し、バチを使った方法も出てきた。頻繁に出番が有るわけでは無いが、ここぞという時の一発の存在感は圧巻。



編入楽器

曲によってあったりなかったりする楽器。ピアノやハーブは比較的多くの曲で使われる。他には鉄琴、木琴、マリンバ等が使われる曲もある。

編入楽器セクションではしばしばピアニストがチェレスタやチェンバロ等、他の鍵盤楽器も担当する。

ハーブ

3000 年以上も昔から存在する最も古い楽器。47 本の弦を自由自在に操る姿はとても優雅に見えるが、硬い弦を弾くため指を酷使し、足もとでは 7 つのペダルを踏み分けなければならず見かけによらず重労働。弦は湿度の影響を受けやすいので、演奏中にも常に調弦には気をつけなければならない。



ピアノ



19 世紀の作曲家は、ピアノを主に協奏曲のソロ楽器として使用し、オーケストラパートとは別格の扱いをしていたが、20 世紀に入るとオーケストラの 1 パートとして扱われるようになった。

メロディーを受け持つというよりリズム楽器として打楽器のように用いられたり、グリッサンドや和音など効果音として使用される事が多い。尚、同類の楽器としてチェレスタ、チェンバロ、パイプオルガン等がある。

サクソフォン

吹奏楽やジャズで特に親しまれている楽器。19 世紀半ばに考案されたが、クラリネットと同じようにマウスピースを使う。比較的新しい楽器のためオーケストラで使われるようになったのは 19 世紀後半に入ってから。



楽器の配置

音量の小さい弦楽器が前、次に木管楽器そして金管楽器、最後尾に打楽器が基本。各楽器群では左側より高音楽器が配置される。

対向配置

19 世紀のオーケストラでは最も一般的。近年採用する指揮者が増えてきている。左に 1st ヴァイオリン、右に 2nd ヴァイオリンを配置する。

20世紀型配置

1930 年代、指揮者ストコフスキーが広めたとされる。管楽器はほとんど変わらないが、弦楽器は客席から向かって左から 1st ヴァイオリン、2nd ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロその後ろにコントラバスと配置される。1950 年頃からは行われるようになったレコードのステレオ録音に適しているとされ、その後世界中のオーケストラに広まった。

この配置以外にも現代音楽の作曲家の中には楽譜中に明確に特殊な配置を指定している事がある。また指揮者がある音楽に対する考えから独自の配置を考案することもある。

オーケストラの魅力



藤岡 幸夫

関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団
首席客演指揮者(2019年~)

オーケストラって本当に不思議で面白いなと思う。50 人~100 人の人間が集まる超アナログ集団だ。例えば練習でアンサンブルが合わないとき 0.05 秒くらいの速さを機械も使わず調整してる。団員さん達個人の技術が高くてやる気がなければ、個人の技術が多少落ちててもやる気のあるオーケストラの方がお客様に感動を与える事ができる。コンサートマスターも不思議。同じオーケストラでもコンサートマスター

が違えば指揮者が同じ振り方をしてもテンポやタイミングが全然違う！何が凄かってコンサートマスターが違えばそれに合わせる事が出来る団員さん達が凄！！こんな摩訶不思議な人間集団って現代ではオーケストラだけ？

そして彼らの奏でる生のサウンドは本当にエキサイティングだ！より多くの方々にコンサートに来て欲しいです。

オーケストラの編成

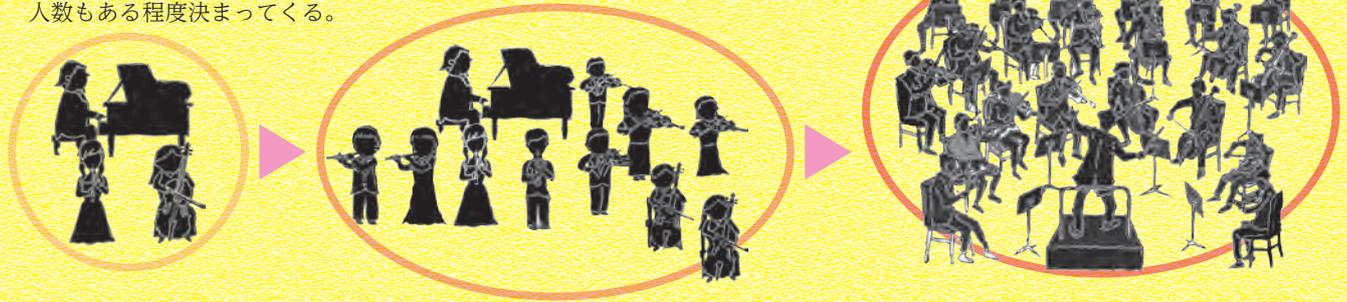
弦楽器の1パートに複数の奏者がいるかどうかで、オーケストラなのか室内楽なのかが決まる。また各パートの人数が少ない、全員で10数名から40名ほどの編成は室内オーケストラと呼ばれる。

一般に言われるオーケストラとは80人くらい、作品によって約40人から150人くらいまでで編成される。

編成を表す一つの基準として、木管楽器の各パートの人数が二人ずつだと2管編成、三人ずつだと3管編成（ロマン派以降に多い）となり、この人数に応じて他のセクションの人数もある程度決まってくる。

弦楽器の場合は第1ヴァイオリンの人数によってあらわされる。たとえば第1ヴァイオリンが12人いれば「12型」。以下第2ヴァイオリン10人ヴィオラ8人チェロ6人コントラバス4人と、低音楽器になるほど人数が少なくなる。

ロマン派に入って管楽器の数が3管、4管と増えていくと弦楽器も14型16型と増えていった。



弦楽器

弦楽器は4種類の楽器で構成されるが、ヴァイオリンが2つに分けられるため5つのパートで演奏される。

馬の尻尾の毛で出来た弓で、羊の腸で作られた弦をこすって音を

出す。テニスのラケットのボールにあたる部分を「ガット」と言うが、これは羊などの腸で作った細いひも状のものという意味。弦の素材も「ガット」とあると言える。

ヴァイオリン

オーケストラ全体をリードするこの楽器は第1と第2とに分かれていて、人数も一番多い。

弦も胴体も温度湿度の変化に敏感。

この楽器の音色は表情豊かで、独奏用としても、合奏用としても大活躍する。第1ヴァイオリンはメロディなどその曲の主要な部分を担当。このセクションの首席奏者が「コンサート・マスター」（女性の場合はコンサート・ミストレス）で、オーケストラ全体のリーダーでもある。

第2ヴァイオリンは高音パートを受け持つ第1ヴァイオリンを下から支えながら、アンサンブルに厚みを持たせる。



ヴィオラ

ヴァイオリンより一回り大きくその分ヴァイオリンより渋く落ち着いた音色で暖かみのある音が出る。第2ヴァイオリンと同じく高音域やチェロなどの低音域を内側から支える名脇役。高音部と低音部のつなぎ役で重要なパートだといえる。



チェロ

太く歌いかけのような優しい音色で、独奏用としても、合奏用としても大変人気の高い楽器。人間の声とほぼ同じ音域。

モーツァルトまでは、もっぱら低音部の伴奏役だったが、ベートーヴェン以降高音域も使われるようになり、更にはヴァイオリンと同じように旋律を奏でるまでになった。



コントラバス

弦楽器セクション最低音を受け持つのがこのコントラバス。他の弦楽器と同じ4弦のものと、低音域に広げた5弦のものがある。胴体のフォルムは他の弦楽器とよく似ているが、他のヴァイオリン属とは少し違い「なで肩」なのはヴィオール属の名残といわれる。ずっしり重みのある音色はまさに土台としてオーケストラの和音の基礎を支えている。



個人賛助会員のごあんない

気軽に一流のクラシック音楽に触れる機会を、日本の隅々にまで提供することを目的に、当協会では1992年から2017年までの26年間で、北海道から沖縄県に至るまで46都道府県118市区町村において321回のコンサートを開催して参りました。

全てのコンサートは、日本政府関係各省庁や開催各地の地方公共団体をはじめ、各種団体、民間企業のご支援等により、入場無料として開催することができました。コンサートに参加された国民の皆様からは、

「とても良いコンサートであった」と高い評価を頂いております。

また、当協会は平成26年10月に公益社団法人の認定を受け、より活発な活動を目指しているところです。

公益法人制度改革を経て、より一層の法人自立が求められている中、この素晴らしい事業の永遠の存続と更なる発展を期して、一人でも多くの国民の皆様方に、個人賛助会員へのご入会を通じて、当協会の活動をご支援頂きたくお願い申し上げます。

【個人賛助会員に関する詳しいお報せはコチラ】 ⇨ <http://www.imea.or.jp/web/support>

クラシックって楽しいな！ (オーケストラにまつわるエトセトラ)

制作：公益社団法人国際音楽交流協会
東北福祉大学 / 株式会社大原の里
ダイキン工業株式会社 / 本願寺
影近設備工業株式会社
大阪ガス株式会社
井村屋グループ株式会社
助成：一般財団法人日本宝くじ協会
協力：株式会社コスモ・アーツアンドテクニクス
挿絵：指宿京
発行：2018年9月

たから
宝くじは、
みんなの暮らしに
やくだ
役立っています。



たから
宝くじは、図書館や動物園、

がっこう
学校や公園の整備をはじめ、

さいがい
災害に強い街づくりまで、

みんなの暮らしに役立っています。

